

フレーズと補文 ―フレーズ補文の実態解明をめざして―*

住吉 誠

[要約]

コーパス言語学の進展で、言語の大部分が複数の語の定型的な連鎖で成り立っていることがわかってきた。このような連鎖は今後、英語研究の中心になっていくと考えられるが、ひとつのケーススタディとして、本稿では連鎖表現がとる補文について考察してみたい。本稿では、これまで補文研究の中心とはなっていなかった *have in common/take turns* といったフレーズがとる補文 (フレーズ補文) について、コーパスからの例を収集・分析し、補文研究で従来から言われてきた「意味が形を決める」「語と補文の連鎖は個別特徴として脳内辞書に記憶されている」といった主張がフレーズ補文を考える際にどの程度まで妥当性があるのかを検証する。また、*take turns* のフレーズ補文を Rohdenburg (2006) が提唱する「大補文推移」との関係で捉えなおし、周辺的な現象であると考えられる向きのあるフレーズ補文の研究が、より大きな英語の問題の解決に少なからず貢献ができる可能性を持つことを示す。

1. はじめに

英語の動詞や形容詞、名詞に後続する *to* 不定詞、*that* 節、動名詞といった、いわゆる補文構造は、これまで多くの研究者の興味を引きつけてきた。理論的な研究では英語の補文構造の共時的な面に多くの関心が向けられる。現代英語において、ある動詞や形容詞がどのような補文をとるかというのは確かに興味深い問題である。

これまでの英語の補文についての多くの研究では、*help* がどのような補文をとるか、*busy* が *in V-ing* をとるか、または直接 *V-ing* をとるかといったような、「単独の語」がどういった形式の補文をとるのかということが議論の中心となってきた。英語の実態を把握するうえで、このようなことは確かに重要な問題である。しかしながら、実際の英語を見てみると、このような単独の語ではなく、いくつかの語が連鎖を形成した *take turns* といったコロケーションや *have in common* といった成句が補文をとることもある。

近年の言語研究には、従来の直観に基づく研究手法から実際に使われた言語資料を重視する研究手法へとシフトする強い傾向がみられる。そのような流れの転換の中で、生成文法が想定するように、母語話者は統語規則にもとづいてすべての文を創造的に生み出しているのではなく、定型表現を多く用いていることが広く認識されるようになった (cf. Pawley and Syder 1983)。このような「言語の定型性」について、例えば Hill (2000: 53) は次のように述べている。

- (1) Estimates vary, but it is possible that up to 70% of everything we say, hear, read or write is to be found in some form of fixed expression. (推定はさまざまであるが、おそらく我々が話し、聞き、読み、書くものの 70% までがなんらかの定型表現である。)

言語の大部分が定型的な連鎖で成り立っているとすれば、単独の語の振る舞いだけでなく、連鎖表現である *have in common* といったフレーズの振る舞いを明らかにすることは言語の理解を深化させるであろう。現代英語の実態を把握するためには、いくつかの語の連鎖からなるコロケーションや成句がどのような補文をとるのか (またはとらないのか) についても明らかにする必要がある。にも関わらず、このようなフレーズの振る舞いは、Vosberg (2009) や De Smet (2013) といった一部の例外を除いてほとんど考察がされてこなかった。

本稿の目的は、このようなフレーズがとる補文のデータをコーパスから発掘し、現代英語の理解の一助とすることにある。フレーズ補文については、第 3 節で詳しく述べるが、このようなフレーズ補文を考えていく中で、従来から言われてきた「統語構

造は意味によって決まる」「補文はそれぞれの語の個別特性である」といった考え方の妥当性、従来の統語分析の手法をこのようなフレーズ補文に当てはめることの妥当性も考えてみたい。さらに、フレーズ補文の研究が、補文の歴史的な変化に関する研究についても貢献できる可能性を持つことも示してみたいと思う。

本稿で引用するデータはすべて、Corpus of Contemporary American English (以下、COCA) と Corpus of Historical American English (以下、COHA) からの引用である。

2. フレーズ

まず、本稿で「フレーズ」という用語で指すものを明らかにしておきたい。

コーパス言語学の進展は、言語の大部分が同じような語の連鎖で成り立っていることを明らかにした。繰り返し生じるこのような連鎖は「慣用的 (idiomatic)」なものであると言える。近年、(1) に類似する発言が、理論言語学者からもなされるようになってきたことは興味深い。Taylor (2012: 282) は、次のように述べている。

- (2) [A] very great deal, perhaps even the totality, of what occurs in a language can be rightly said to be 'idiomatic'. (言語表現の大部分、おそらくすべてが「慣用的」と言ってよい。)

Taylor (2012) は、「文は文法規則に従って単語が並べられて合成的に産出される」と考える生成文法のような文法モデルを the dictionary plus grammar book model と呼んでいる。彼は、言語の大部分または全部が、このような「合成的」な the dictionary and grammar book model で説明できない「非合成的な」慣用的連鎖から成り立っていると述べている。

このような慣用的な連鎖を本稿ではフレーズと呼ぶ。フレーズには、fire engine といった複合語、put off といった句動詞、a strong wind といったコロケーション、keep X's fingers crossed といった成句のような連鎖のみならず、not only X but also Y といった相関表現などが含まれる。さらに第3節で述べるが、<say + that 節>、<be surprised + to V> といった動詞や形容詞、名詞がとる補文構造もフレーズ的一种である (cf. Hunston and Francis 2000)。何をフレーズとみなすかは研究者の立場によってさまざまではあるが、フレーズを一部のイディオムに限定せず、コロケーション、定型表現、補文構造といった連鎖にまで拡大したのは、イギリスの Sinclair の系譜につながる (Granger and Paquot 2008: 28f.)。本稿もこの立場に立つものである。特にフレーズ的一种である<動詞/形容詞/名詞など + 補文構造>の連鎖を、他のフレーズと区別して、「パタン」と呼ぶこともある。

このようなフレーズは、文法規則にしたがってひとつひとつの語が組み合わされて合成的に作られるのではなく、いくつかの語の連鎖がまるごと選択され非合成的に作られるものが多い (cf. Sinclair 1991)。この「非合成性」はフレーズの特徴の一つで、「文法的非合成性」と「意味的非合成性」に分けられる (Moon 1998: 8)。例えば、フレーズの例として頻繁に挙げられる *by and large* は、違う品詞の語句を等位接続詞が結んでいるという意味で「文法的に非合成的」であるし、それぞれの語の意味を足してもこの句全体が表す「一般的に」という意味は出てこないで「意味的に非合成的」である¹。この連鎖は、それを構成するひとつひとつの語に文法規則を適用して形成されるのではなく、内部の文法構造を意識することなく、この3語の連鎖がまるごと選択されて産出される。フレーズは文法構造を意識しないまま産出されるので、表面的には従来の文法規則から逸脱するような形になるものが多い。

一方で、フレーズの研究が進むにつれて、「非合成性」という特徴が観察されない連鎖であっても、固まった形で繰り返し使用されるのであればフレーズとしてみなすことが増えてきた。このあたりの事情は、Granger and Meunier (2008: xviiiif.) の次の言葉によく表れている。

- (3) Whereas previously phraseology had encompassed the study of only the most fixed and opaque multi-word units, it now covers a much wider range of lexical units, many of which display a high degree of syntactic variability and semantic compositionality. (以前のフレーズ研究は、統語的にほぼ固定され意味的に非合成な語の連鎖のみを対象としていたが、最近ではより多くの語の連鎖を研究対象とするようになった。その多くは連鎖を形成する語がほかの語と交替可能であったり、意味的に合成的であったりするものである。)

結局のところ、いくつかの語が慣習的に連鎖として使用されるのであれば、「非合成性」という特徴がなくともフレーズとみなすことができるということになる。このように扱う対象が広がってきたのは、コーパスが巨大化していくにつれ、考えられていた以上に頻繁に一定の語の連鎖が使用されているということが見えてきたこととも関係する。「連鎖する」という条件さえ満たせば、とにかく何でもフレーズとみなすようになってしまう危険性があることは十分承知しているが、本稿ではフレーズの厳密な定義をするのが目的ではない。本稿で扱う連鎖は、コロケーション、成句も含めて、フレーズであることに問題はないと思う。ここで触れた特徴も勘案しながら、次の節でフレーズのとり補文について考えてみよう。

3. フレーズのとるパターン

3.1 フレーズ補文

本稿では、動詞、形容詞といった語がとる補文を「語彙補文」と呼び、本稿で議論の中心となるフレーズがとる補文を「フレーズ補文」と呼ぶことにする。例えば、Quirk et al. (1985: 1180ff.) で補文を取る動詞として挙げられている多くのものが *agree* といった単独の語であり、本稿ではこれら単独の語がとる補文は「語彙補文」と言う。

一方、「フレーズ補文」について考えてみよう。英語の実態を見ると、*have in common* や *keep/have X's fingers crossed* といったフレーズがさらに補文を従えることがある。動詞が従える補文を動詞補文というように、本稿ではフレーズが従える補文は「フレーズ補文」と言う。具体例をいくつか見てみよう。

(4) <フレーズ + that 節>

- a. ... and he, just as I do, kept his fingers crossed that the harvest would be good... (COCA)
- b. You know, we have in common that we were both deprived because he was poor and I was black. (COCA)
- c. The Indian shook his head that he didn't know. (COCA)

(5) <フレーズ + to V>

- a. But instead of taking turns to tend to your sick child, try to get five straight hours of sleep. (COCA)
- b. I wonder if you might give Becky a hand to sort it out while you're here? (COCA)

(6) <フレーズ + V-ing>

- a. Like your guest has mentioned, a lot of people have difficulty dealing with that. (COCA)
- b. However, instead of writing the verb conjugations, the students must take turns saying them aloud. (COCA)

keep X's fingers crossed は英語圏で使用されるジェスチャーの一種を表しているが、これは「望む」という慣用的意味で使われる。この形を構成するひとつひとつの語の意味を足すと「指を交差させる」の意味であり、全体が表す「望む」の意味は出てこない。「望む」の意味はフレーズ全体が表す意味であり、この連鎖は意味的に非合成と言えるのでフレーズとみなすことができる。このフレーズが *that* 節を従えるので、これをフレーズ補文と呼ぶ。

第2節で述べたように、本稿は＜say + that 節＞といった語彙がとる補文構造もフレーズの一種であるパターンとみなす。a heavy rain のような語の連鎖をコロケーション、語と前置詞や補文の連鎖をコリゲーションといった区別をすることもあるが²、どちらも連鎖表現であることに変わりはなく、本稿では取り立ててこれらを区別せずフレーズに含めている。したがって、keep X's fingers crossed というフレーズが that 節の補文をとって、＜keep X's fingers crossed + that 節＞という連鎖がパターンであると考ええる。このパターンでは「…と指を交差させた」の意味ではなく、「…と望む」という意味を表す。

程度の差はあるが、これらのフレーズは受け身化といった統語操作を拒むものも多い。keep X's fingers crossed は次の例で見るように受け身になり、そのあとに補文をとることも可能である。

- (7) a. Right now our fingers are crossed that he'll be home for Christmas. (COCA)
 b. My fingers were crossed that we'd get good media coverage. (COCA)

このような例は、keep X's fingers crossed という成句は受け身化しても、フレーズが表す「望む」の意味が消えないことを示している。一方で、shake X's head はほとんど受け身の例が確認できないし、take turns や have difficulty などが受け身になることはない。これらは＜他動詞 + 目的語＞という形で文法的には合成的であるが、通常の他動詞構文と異なり受け身操作との親和性が極めて低いという点で、固定した連鎖のフレーズである。ここで挙げた＜take turns + to V/V-ing＞、＜give X a hand + to V＞、＜have difficulty + V-ing＞はすべてフレーズが補文をとるパターンである。

3.2 フレーズ補文の非合成性

ここで (4c) を題材にフレーズ補文の合成性について考えてみよう。

例えば I have the idea that he is not quite honest (Jespersen 1927: 27) では、idea が後続する that 節を動機づける名詞であるので、「…という考えを持っている」を意味する。＜have the idea + that 節＞は文法的にも意味的にも合成的である。フレーズは合成的であってもよいので、これもフレーズが補文をとってパターンをなすと考えてよい。

一方、(4c) では shake も X's head も後続する that 節を文法的に動機づけるようなものではない。shake X's head というコロケーション表現 (フレーズ) 全体が that 節補文を従えている、すなわち＜shake X's head + that 節＞というパターンが内部構造を意識されないまま、まるごとフレーズとして選択されたと考える必要がある (文法的に非

合成)。また、shake X's head は文字通りには「首を横にふる」ということであり、that 節を従えて初めて「首を横にふって…ということを示した」という意味を表すことができる。これは convey that... by shaking X's head のごとき意味であり、<shake X's head + that 節>では say などを使わずに伝達の意味が表されるという点において、意味的に非合成である。

従来の英文法の規則に則ってこのようなフレーズ補文を説明しようとする、例えば「省略」といった操作で従来の文法規則との整合性を保たねばならなくなる。ここで take pride/pride oneself というフレーズが that 節をとったパターンを考えてみよう。まず例を挙げる。

- (8) a. But it seems like you are almost taking pride that our society is evolving. (COCA)
- b. But my brothers and I take pride that, as self-made players, we have all played at basketball's highest levels. (COCA)
- (9) a. I pride myself that I'm a prudent man, and I believe that patience is a virtue... (COCA)
- b. My dad prided himself that he'd never had a layoff, and... (COCA)

名詞の pride は同格の that 節との親和性が低く、従来の英文法の規則に従えば、(8) の例で後続する that 節の統語的な説明をどうするかという問題がある。(9) も pride の品詞は違うが後続の that 節をどう説明するかという問題がある。そのようなこともあり、ある英和辞典は、このような例が pride oneself on the fact that 節から on the fact が省略されたものである旨の記述をしているが、このような考え方にはどれほど事実の裏付けがあるのであろうか。検証してみよう。

試みに COHA で pride myself on the fact that の連鎖を検索してみると、1931 年に次の例が確認される。

- (10) I have always prided myself on the fact that I could get along with all sorts of people,... (1931) (COHA)

ところが、<pride myself + that 節>のパターンはすでに 1893 年に確認され、省略前とされる (10) の例よりも随分前に使用され始めたことがわかる。

- (11) I can't pride myself that it compares with your Spanish accent,... (1893) (COHA)

検索で myself 以外のすべての self 形もヒットするように検索条件を変えてみる³と、COHA のなかで一番古い例が 1840 年代の次例である。

- (12) ...but he thinks not of their market value, nor does he pride himself that another child can not play with the same. (1843) (COHA)
- (13) ...we find him priding himself on the fact that his measures have tended to the promotion of our exchanges with distant nations,... (1849) (COHA)

これからわかるように、省略後とされる形である (12) の方が、省略前と想定されている (13) よりも早く出現していることがわかる。省略という操作で構造を説明するためには、省略される前の形が省略形より先に存在してこそ妥当な説明法となる。ここで行ったものは簡易な検索であるので、もっと詳細な調査が必要なことは認めるが、(10) から (13) のような事実は、<pride oneself + that 節>を pride oneself on the fact that の省略形と考えることに、一石を投じる結果であろう。

伝統文法の時代から、本来 that 節を従えないような語彙や表現に that 節が後続した例を the fact の省略という考え方で説明する試みが見られた。複合前置詞句である on account of に (that) 節が従う場合や、本来 that 節との親和性が極めて低い ignore が that 節をとった場合に、こういった形が通常の文法規則では認められないので、on account of the fact that 節 / ignore the fact that 節から the fact が省略された結果生じたものであると考えるといったことがあった (OED2, s.v. *account*; Curme 1931: 256; Denison 1998: 260 など)。しかしながら、on account of the fact that 節は<on account of + 節>の用法より後の時代になって使われ始めたということもあり (住吉 2016: 123)、このような省略による説明は全面的に支持できない面がある。ここで問題にした<pride oneself + that 節>についても同様である。

もちろん、たとえこの場合に省略という説明が可能であっても、それがすべてのフレーズ補文に当てはまるかはまた別の問題である。<shake X's head + that 節>にいたっては、that 節の前に何かの要素が省略されていると想定することは難しいだろう。

本稿では、ここで挙げた例を統語的な操作を使用して説明するのではなく、<フレーズ + that 節/to V/V-ing>といったパターンが内部構造を意識されないまま、つまり、フレーズを構成する個々の語の品詞などが意識されることなく、まるごと選択されたと考える。

3.3 補文を決定する要因は何か: 意味と個別特性

Levin (1993) の出版以来、動詞がとる項構造は意味的な要因によって決定されると

ということが一般的な認識となった感がある。彼女は The behavior of a verb, particularly with respect to the expression and interpretation of its arguments, is to a large extent determined by its meaning. (動詞の振る舞い、特にその項構造の統語的な形と意味解釈については、かなりの程度まで意味によって決定される) (p. 1) と述べている。これを敷衍すると、語彙補文、特に動詞がどの補文をとるかを決めるのは動詞の意味であるということになる。すなわち、似た意味の動詞は同じ補文構造をとるという考えにつながっていく。このような考えにもとづく研究には Dixon (2005) がある。

どの補文構造をとるかを決定するのは語の意味であるとする主張は、ある語が、似た意味を持った語の影響により、それまでとらなかった構造をとるようになる場合、すなわち類推で補文構造が拡大する場合にも適用できる。apologize が be sorry の影響から that 節をとるようになった変化の場合⁴もそうであるし、次の disagree もそうである。

(14) a. ?I disagree that heart transplants should be stopped.

b. ✓I don't agree that heart transplants should be stopped.

(15) When the subject is a particular person, use **not agree** to introduce a **that** clause: 'I don't agree that the people there are repressed.' 'She cannot agree that farmers should be an exception.' In more general statements, **disagree** is usually used with **not, nobody etc** before a **that** clause, to give an affirmative meaning; 'No one can disagree that these crimes must be stopped.' (= everyone must agree that...) 'Few would disagree that she has served her country well.' (= most would agree that...) (Turton and Heaton 1996: 100)

Turton and Heaton (1996) は、(14a) のように特定の人物が主語に立った場合、disagree が that 節に従えるのを規範的に好ましくないものと考えており、(14b) のように <not agree + that 節> を使うことを推奨する。さらに (15) で示されるように、否定的な文脈で <not など + disagree> の形で意味的に肯定になる場合に that 節に従えることがあることを述べている。

このような規範的な意見は、どの程度事実を反映したものであろうか。試みに COCA で検索すると、さまざまな主語が共起した <disagree + that 節> の形が確認できるし、Turton and Heaton が言うように否定的な文脈に限ったものでもない。4 例挙げる。

(16) Thirty percent of Hungarians and 22 percent of Poles disagreed that diversity was a good thing... (COCA)

- (17) Mr. Boyd also disagreed that the intervention was fair and... (COCA)
 (18) ... he looked into the camera and he disagreed that his policies were rejected. (COCA)
 (19) Only eleven percent disagreed that behavior increased or improved. (COCA)

確かに、(16) や (19) のように漠然とした集団が主語になる場合が多くみられるが、必ずしもそれらに限定されているわけでもない。ここからもわかるように、disagree は「特定の人物が主語に立つと that 節をとらない」とか「否定的な文脈で that 節をとる」といった規範からは解放されている。このような <disagree + that 節> のパタンが生起がふつうに見られるようになったのは、<agree + that 節> からの類推が大きくはたらいっていることは間違いないだろう。その意味において、動詞の意味がどの統語構造をとるかを決定するというのは、一般的には妥当な考え方である。

しかしながら一方で、実際に英語の実態を見ると、ある意味範疇に属する語とそれらがとる補文構造は決して一様ではないことがわかる。例えば、同じ発話様態動詞という範疇に属していても、それぞれの語と that 節との親和性は大きく異なっている。gasp は that 節との親和性は極めて低度であり、大規模コーパスを検索してもほとんど例が確認されない（これはもちろん <gasp + that 節> の語彙補文が非文法的であるということの意味しない）。一方、whisper は that 節との親和性が高い (gasp, gibber, whisper などの発話様態動詞と that 節の定量的な考察については住吉 (2001) を参照。また、that 節を取る動詞についての概要は住吉 (2016) を参照)。このような親和性の差は、いくつかの語が同じ意味範疇に属していても、それらの語がすべての統語的振る舞いを共有しているわけではないことを示している。

確かに、似たような意味を持つ語や表現は似たような統語構造に現れる傾向がある。しかし、それぞれの語や表現にはそれぞれの個性があり、ある語がある補文構造をとるかどうかについては、範疇的な意味がすべてを決定するのではなく（すなわち、発話動詞という範疇に属するから that 節を必ずとるということにはならない）、その範疇に属する語の個別の特性も大きく影響することは正しく認識しておかねばならない。

Klotz (2007) は、動詞のとる補文構造がどの程度まで意味的な要因によって決定されるのかを検討している。彼は、動詞の補文は意味的に決定される規則的な現象ではなく、ある語がどのような補文をとるかは、不規則な語彙的事象として脳内辞書に蓄積されていると結論付けている。これはすなわち、ある語がとる補文構造は意味によって決まるのではなく、それぞれの語の個別特性的な (item-specific) 特徴として記憶されていることを指摘したものである。

- (20) [T]he statistical analysis of complementation data from *the Valency Dictionary of English* does not lend support to the view that the valency of a verb can be deduced from its meaning. The storage view of valency which sees it as an irregular lexical rather than semantically rule-based phenomenon is strengthened further. (Klotz 2007: 127) (VDE (『英語補部辞典』—筆者注) の補文データを統計的に分析してみると、動詞がどのような統語構造をとるかをその意味から推測できるという主張を支持することはできない。それぞれの語がとる統語構造は意味的規則にもとづいた現象ではなく、個別に脳内辞書に蓄積されている不規則な語彙的現象であるという考え方がますます妥当性を帯びる。)

ここで、フレーズ補文の個別特性的な面を考え、必ずしも意味が統語形式を決定しないということを見てみよう。「共有する」という意味を表すフレーズである *have in common* は、そのフレーズ補文として *that* 節に従える。すなわち *<have in common + that 節>* で「…という共通点を持っている」という意味を表す。

- (21) The link between these composers really is that they all have in common that they wrote both for the opera stage and for the Broadway stage. (COCA)
- (22) You know, we have in common that we were both deprived because he was poor and I was black. (COCA) (= (4b))
- (23) ... but they have in common that they must create a profit for the companies that manufacture them. (COCA)
- (24) The remaining clowns such as Rand Paul, Carly Fiorina, Chris Christie, et al., have in common that they have experienced massive failures in their public life but they totally deny these facts. (COCA)

have in common は辞書の説明からもわかるように (cf. *Longman Dictionary of Contemporary English*, 6th edition, s.v. *common*, n.), *share* の類義表現である。では *share* が *that* 節を取る可能性はあるのだろうか。COCA で調査してみよう。

辞書などでは指摘がないが、実は *share* も *that* 節に従えることがある⁵。COCA の例を検討すると、*<share + that 節>* は大きくふたつのタイプに分けることができる。ひとつは、*share* が発話動詞に近づき、「…と言って (私たちに) 教えてくれる」という意味を表す場合である。この場合は、発話者が持っている情報を発言によって聞き手と共有することに意味の焦点が置かれている。例を挙げよう。文脈を示すため、一

部例が長くなる。

- (25) Williams shared that he wanted to celebrate his upcoming fiftieth birthday in a big way, and that included gaining a wife. (COCA) (ウィリアムは、来るべき 50 歳の誕生日を、結婚するというのもふくめて盛大に祝いたいと教えてくれた。)
- (26) As I was hauling them out of the classroom, the custodian stopped me and asked me why I was getting rid of his tinikling poles. Completely clueless as to what he was talking about, I just shook my head. He then shared that he had brought these poles with him from the Philippines when he had moved to Canada. He started sharing with me about how the tinikling dance is the national dance of the Philippines. (COCA) (Completely 以下訳: 彼が言っていることが何のことか全くわからなかったなので、私は首を横に振った。そうしたら、彼はカナダに移住するときに、フィリピンからこのポールを持ってきたのだと教えてくれた。)
- (27) This song is one of the most empowering female songs of the genre and it seemed to resonate for Lauren, who shared that some of the public's criticism of her has been hard to deal with and she is fighting to move past it. (COCA) (この歌はそのジャンルでは女性に最も力を与えてくれるもののひとつであり、ローレンにも共感できるものようだった。ローレンは、彼女に対するこれまで批判のいくつかは扱いに困るものがあり、それをなんとか乗り越えようとしているのだと教えてくれた。)

このような例からわかるように、この「発言により情報を共有することで…ということ」を教えてくれる」という意味の場合は、主語に<人>が立つ。発言者が聞き手と情報を共有し、主語は単数主語が多いという特徴がある。このような例が「発言による共有」を表すことは、(26) の後半にある *sharing with me about how...* の形からもわかるし、次のような例からも明確である。

- (28) “For me, wearing the mask often meant having the most patience of the group so as to not be swiftly labeled as angry, combative or argumentative,” said one Mask Project participant. Another shared that “I tend to tone down my relational side when I come in the door I’m scared of appearing too friendly, too emotional.” (COCA) (「私にとって、マスクをかぶるというのは、グループの中で一番我慢強いということの意味していて、怒っている、好戦的だ、議論好きだといったようなレッテルをすぐに貼られないようにするためだったのです」とマスク・プロジェクトの参加者が言った。)

別の参加者は「部屋に入ると感情的な面を抑えるようにしています。親しすぎるとか、感情的すぎるとかという印象は与えたくないのです」と教えてくれた。

もう一つの＜share + that 節＞のタイプは、複数主語で「…という意見を共有している」という意味を表すものである。

- (29) Two of those nine students shared that they selected courses themselves because they felt their school counselors were not helpful. (COCA) (9人の学生のうち2人は、自分たちで科目を選ぶのは、スクールカウンセラーが役に立たないからという同じ意見を持っていた。)
- (30) In addition to promoting reflection about reading performance, the candidates believed that the use of the digital technologies encouraged student self-monitoring and goal-setting. The candidates shared that the use of digital technologies, such as the Flip cameras and audio recorders helped the students feel ownership about their work. The candidates shared that students received immediate audio and visual feedback in seeing and hearing their reading behaviors when reading aloud. (COCA) (リーディングの能力についてあれこれ考えるきっかけを与えることに加え、デジタル技術を使えば、生徒が自分で自分の活動をチェックし、目標を設定することを促すと学位取得有資格者たちは信じていた。彼らは、フィリップカメラやオーディオレコーダーなどのデジタル技術を使えば、生徒が自分たちの勉強を自ら行ったという思いを持つことができるということでは同意見であった。また、朗読するときに自分たちの読んでいる姿を見たり聞いたりすることで生徒たちは目や耳から直接フィードバックを受けるということでも同意していた。)

これらの例からわかるように、この場合の share は、「…という意見を共有している」つまり agree に近い。＜share + that 節＞は主語の単複に応じて、「…と述べて情報を共有する」「…という意見を共有している、同意している」を表し、おそらくそれぞれ say や agree からの意味的類推がはたらいっている。しかしながら、(21) から (24) の例で確認したように、＜have in common + that 節＞の場合は、that 以下の特徴を共有しているということである。つまり＜share + that 節＞、＜have in common + that 節＞はそれぞれ異なる意味を表している。share が that 節を取るから、その意味的類似性から have in common も that 節を取るということにはならない。that 節を従えるという特徴は「共有」という意味の特徴ではなく、それぞれの意味を表すために＜share + that

節>、<have in common + that 節>というそれぞれのパターンが持つ個別の (item-specific) 特徴である。share が that 節をとるからその意味的な動機付けによって have in common も that 節をとるということではなく、別の意味を表すためにたまたまそれぞれの形で that 節が使われたにすぎない。

Faulhaber (2011a: 6) は、A valency pattern can be defined as the simultaneous choice of one or a number of complements in combination with a verb functioning as valency carrier. (動詞のとり統語パターンは、パターンの中心となる動詞と一緒にいくつかの補部がまるごと選択されたものと定義できる) と述べており、<動詞 + 補文>という構造のフレーズ的な特徴を指摘している。また Faulhaber (2011b) は、どの語がどの補文構造をとるかは語彙修得時に脳内辞書に蓄積されるとし、補文構造の産出は意味的規則に基づいたものではなく、記憶が果たす役割が大きいことを主張している⁶。

このような記憶にもとづく補文構造の説明は、確かに、意味によって説明できない英語の事実のひとつの解決を示すものであるが、一方で、通時的な英語の補文の変化の説明を難しくする。すなわち、なぜ disagree や apologize が that 節をとるようになるのかということについては、記憶による説明は解決にならない。なぜなら、補文が記憶されるべき個別的事象であるとする考えは、それまで存在しなかった<disagree/apologize + that 節>という連鎖がどのようなきっかけで生まれるのかを説明しないからである。

補文構造の実態はあまりにも複雑であるので、意味的な説明だけ、または、記憶だけのどちらか一方ですべてを説明するのではなく、意味的な動機付けがある場合と意味的な動機付けがない場合の両方があると考えねばならない。意味的な動機付けがある場合は、意味は統語構造に反映し、類義表現は類似の統語構造に生じる。また、たとえ同じような意味範疇に属していたとしても違う統語構造で用いられるのは、個別の語の意味の違いの反映であり、これも意味的な動機付けの結果である。一方で、意味的な動機づけのない<have in common + that 節>というようなパターンは、そのままの形で脳内辞書に記憶されていると考える。

4. より大きな問題への示唆

冒頭の (1) や (2) で引用したように、言語の大部分がフレーズから成り立っていることが主張されるようになってきた。合成的なものであれ、非合成的なものであれ、フレーズ自体は英語にも多く観察されるが、個々のフレーズをみると、それぞれの出現の頻度に高低があることは事実である。これまで述べてきたようなフレーズ補文は、語彙補文と比較すると頻度が高いというわけではなく、どちらかというと英文

法の周辺に位置していると反論があるかもしれない。このようなフレーズ補文をより中心的な問題として扱うことで、英文法の理解の深化にどのような貢献ができるのであろうか。最後にこの点について考えてみよう。

4.1 大補文推移

英語を通時的に眺めると、ある語がとる補文は時代によって変化していることがわかる。Rohdenburg (2006) はこのような変化を大きく 5 つに分類し、それを「大補文推移 (Great Complement Shift)」と呼んだ。ここでそれらをすべて詳述する余裕はないが、Iyeiri (2010) ではこれらを大きくふたつに分け、「that 定形節から to 不定詞へ」という推移と「to 不定詞から動名詞へ」という推移にまとめている。このような推移の基底には、定形節を犠牲にして非定形節が増えていく流れ (that 節→ to 不定詞→動名詞) がある (Denison 1998: 256)。

Vosberg (2009) は、本稿でフレーズと呼んでいる連鎖である *have no business* が歴史的にどのような補文と共起していたのかについて定量的な調査を行い、このフレーズがとる補文は *to* 不定詞から *V-ing* へと変化してきたと主張している。この推移は大補文推移と合致するものである。彼の研究は、フレーズがとる補文を考察することで、より大きな問題の解決に貢献できることを示した好例である。以下では、*take turns* というフレーズがどのような補文をとり、それらがどのような推移を見せてきたのかについて、COHA からのデータをもとにして考えてみよう。

4.2 *take turns* と大補文推移

take turns がとる補文は、以下の 3 つが確認できる。例文末尾は当該例の生起した年を表す。

(31) <take turns + to V>

- a. They took turns to speak in French accents. (2003) (COHA)
- b. There was a small inner room like a cupboard where, morning and afternoon, these girls took turns to make the tea. (1980) (COHA)

(32) <take turns + 前置詞 + V-ing>

- a. ... the men were taking turns in offering bits of fruit to the birds, ... (1983) (COHA)
- b. All the while Lemuel and Ora and Amanda took turns in stirring the cider and feeding the fire. (1942) (COHA)

(33) <take turns + V-ing>

- a. We take turns getting up at night. (2002) (COHA)
- b. This year, rumor had it that employees were supposed to take turns standing on chairs and falling backward into one another's arms. (2004) (COHA)

take turns は「交代です」ということであり、後続する補文はどのような動作を交代するのかということを示す。このような 3 つの補文のうち、V-ing を直接従える形は LDOCE6 には記述があるが、OALD9 にはない。多くの英和辞典では to V を挙げるが、次に見るように、実は現代英語ではこの形はかなりの低頻度である。

De Smet (2015) は、take turn V-ing における V-ing は現在分詞が補文化したもの、take turns in V-ing における V-ing は動名詞とみなしている。同じ表現につづく V-ing の品詞をこのようにふたつにわけるのはあまり意味のないことであろう。この問題を考える際には、V-ing が前置詞の介在なしにフレーズに後続できるようになるという事実のほうが重要である。

それぞれのパタンの頻度を COHA で見てみよう。ここでは take turns のすべての異形を含めて検索し、すべて手作業で例を確認した。19 世紀、20 世紀それぞれを前半と後半で分けて、頻度を示したものが表 1 である。

	take turns + to V	take turns + 前置詞+ V-ing	take turns + V-ing
1810-1849	1 (17%)	5 (83%)	0 (0%)
1850-1899	10 (18%)	44 (77%)	3 (5%)
1900-1949	3 (2%)	60 (45%)	72 (53%)
1950-2009	8 (3%)	22 (10%)	199 (87%)

表 1: COHA における take turns のフレーズ補文の頻度(Sumiyoshi 2015)

一見してわかるように、不定詞補文はここで調査した 200 年を通じてほとんど用いられていないが、それでも 19 世紀は 2 割弱の使用例が確認されていた。take turns の後の to 不定詞は、時代を下るとほとんど動名詞に取って代わられたことがわかる。一方、前置詞の後に動名詞が続くパターンは、19 世紀後半には優勢形であったが 20 世紀前半には前置詞を伴わない形と拮抗しはじめ、20 世紀後半には take turns に直接 V-ing が続くパターンが使用例の 9 割近くを占めるまでに至っている。このような推移は <take turns + V-ing> がパターンとして確立したことを示している。このような take turns の補文の推移は、まさしく大補文推移に従ったものであり、フレーズ補文の分析がより大

きな問題へと展開していくことを示している。

5. おわりに

本稿では、フレーズがとる補文の例を見ながらフレーズ補文とは何か、フレーズがとる補文パターンにはどのような特徴がみられるのかを検討してきた。その議論の過程で、従来の補文研究で言われてきた「意味が形を決める」「補文は語の個別の特性である」といった主張や統語操作による説明が妥当性を持つものかどうかを検討した。また、フレーズ補文を検討することで、大補文推移といったようなより大きな問題の解決に貢献できる可能性があることを示した。検討されるべきフレーズはまだ多く、今後の検討が俟たれる。

注

*本稿は、科学研究費（若手 B）「フレイジオロジーの考え方を援用した英語の語彙補文・フレーズ補文の記述的研究」（課題番号: 26770175（代表者 住吉 誠（平成 26 年度～平成 28 年度（予定））の助成を受けたものである。本稿の前半は、同科研費の助成で可能になった住吉（2016）の前半部分に新たな言語資料を追加してコンパクトにまとめなおしたものである。

1. 句源的には、by と large は海事用語でそれぞれ「風上で」と「風下で」を意味する副詞であった（OED2, s.v. by）ので、もともと文法的にも意味的にも非合成的ではないが、現代英語においては通常そのような句源は意識されないので、他の研究に従って文法的大体意味的に非合成としておく。
2. BBI3 では、コリゲーションを「文法的コロケーション」（grammatical collocation）と呼び、コリゲーションもコロケーションの一種と考えている。呼び名こそ違いが、本稿の立つ立場に近いと思う。
3. 検索列は [pride] PPX1 that と [pride] PPX2 that である。
4. 住吉（2016）第 11 章参照。
5. 筆者が share が that 節を取る事実気づいたのは、査読委員の先生のご指摘による。そのため議論の内容に手を加えることになった。当初の議論では share と have in common の振る舞いには画然とした違いがあると考えていたが、ご指摘を受けてその考えを修正した。この点についてはもっと深い考察と議論が必要であり、今後の研究の課題としたい。改めて査読委員の先生のご指摘に感謝するものである。
6. Faulhaber は the importance of the role of storage or memorization of valency patterns in combination with the verb as the valency carrier (p. 331) と表現している。

参考文献

- Curme, Geroge (1931) *Syntax*, Boston: Heath,
- Denison, David. (1998) "Syntax," *The Cambridge History of the English Language, VOL. IV, 1776-1997*, ed. by Suzanne Romaine, 92-329, Cambridge: Cambridge University Press.
- De Smet, Hendrik (2013) *Spreading Patterns: Diffusional Change in the English System of Complementation*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Dixon, Robert, M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*, Oxford: Oxford University Press.
- Faulhaber, Susen (2011a) *Verb Valency Patterns: A Challenge for Semantics-Based Accounts*, Berlin: Mouton.
- Faulhaber, Susen (2011b) "Idiosyncrasy in Verb Valency Patterns," *Zeitschrift für Anglistik und Amerikanistik* 59.4, 331-346.
- Granger, Sylviane and Magali Paquot (2008) "Disentangling the Phraseological Web," *Phraseology. An Interdisciplinary Perspective*, ed. by Sylviane Granger and Fanney Meunier, 24-49, Amsterdam: John Benjamins.
- Granger, Sylviane and Fanny Meunier (2008) "Introduction: The Many Faces of Phraseology," *Phraseology: An Interdisciplinary Perspective*, ed. by Sylviane Granger and Fanney Meunier, xviii-xxviii, Amsterdam: John Benjamins.
- Hill, Jimmie (2000) "Revisiting Priorities: From Grammatical Failure to Collocational Success," *Teaching Collocation*, ed. by Michael Lewis, 47-69, Boston, MA: Heinle.
- Hunston, Susan and Gill Francis (2000) *Pattern Grammar*, Amsterdam: John Benjamins.
- Iyeiri, Yoko (2010) *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English*, Amsterdam: John Benjamins.
- Jespersen, Otto (1927) *A Modern English Grammar, on Historical Principles, Part III, Syntax, Second Volume*, London: Allen and Unwin.
- Klotz, Michael (2007) "Valency Rules? The Case of Verbs with Propositional Complements," *Valency: Theoretical, Descriptive and Cognitive Issues*, ed. by Thomas Herbst and Katrin Götz-Votteler, 117-128, Berlin: Mouton.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, Chicago: Chicago Univ. Press.
- Moon, Rosamund (1998) *Fixed Expressions and Idioms in English: A Corpus-based Approach*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Pawley, Andrew and Frances H. Syder (1983) "Two Puzzles for Linguistic Theory: Nativelike Selection and Nativelike Fluency," *Language and Communication*, ed. by Jack C. Richards and Richard

- W. Schmidt, 191-226, London: Longman.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rohdenburg, Günter (2006) “The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complementation System,” *Syntax, Style and Grammatical Norms*, ed. by Christiane Dalton-Puffer Dieter, Kastovsky, Nikolaus Ritt and Herbert Schendl, 143-166, Bern: Peter Lang.
- Sinclair, John (1991) *Corpus Concordance and Collocation*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- 住吉 誠 (2001) 「発話様態動詞と that 節の適格性について」『英語語法文法研究』 第 8 号, 126-140. 東京: 開拓社.
- Sumiyoshi, Makoto (2015) “How Great is the Great Complementation Shift? In cases of phrase complementation,” Paper read at BICLCE 6 (6th Biennial International Conference of Linguistics of Contemporary English) (University of Wisconsin-Madison).
- 住吉 誠 (2016) 『談話のことは 2 規範からの解放』 東京: 研究社.
- Taylor, John, R. (2012) *The Mental Corpus*, Oxford: Oxford University Press.
- Turton, Nigel, D. and Brian J. Heaton (1997) *Longman Dictionary of Common Errors*, London: Longman.
- Vosberg, Uwe (2009) “Non-finite Complements,” *One Language and Two Grammars?*, ed. by Günter Rohdenburg and Julia Schlüter, 212-227, Cambridge: Cambridge Univ. Press.

コーパス

- COCA: Corpus of Contemporary American English (accessed in August 2015 and September 2016)
- COHA: Corpus of Historical American English (accessed in August 2015 and September 2016)

辞書類

- BBI3: *The BBI Combinatory Dictionary of English* (2010) Amsterdam: John Benjamins.
- LDOCE6: *Longman Dictionary of Contemporary English* 6th edition (2014) London: Pearson.
- OALD9: *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (2015) Oxford: Oxford Univ. Press.
- OED2: *Oxford English Dictionary on Historical Principles* 2nd edition on CD-ROM, Version 4.0, Oxford: Oxford Univ. Press.

Summary

This study analyzes phrase complement patterns (e.g., “*have in common* + *that*-clause” and “*take turns* + *V-ing*”) on the basis of data garnered from corpora and examines to what extent the semantics-based view and storage view of English complement patterns are valid in the investigation of phrase complement patterns. In addition, this study argues that phrase complements, which have been thought to be in the periphery of English grammar, should come to the foreground, granted that languages have a phraseological nature. While in discussion, this study shows that the empirical analyses of phrase complements can make a contribution to the clarification of how the English complementation system has changed in history (the Great Complement Shift advocated by Rohdenburg).